

教育心理学関係

博士論文要旨

(2006年10月～2007年9月)

ここに掲載する博士論文要旨は、1996年から自己申告によるものとなりました。

北海道大学大学院文学研究科

博士(文学) 加地 雄一

「記憶における動作と言語の相互作用—被験者実演課題と手話の記憶を中心に—」

言語的指示に従って行う動作の記憶は、被験者実演課題(SPTs)によって研究されてきた。SPTsとは、動作文(e.g. “拍手をする”)を実演して記録する課題である。本論文は、①SPTs研究の論争点である運動構成要素の重要性について検討し、②動作が伴う他の記憶課題(書記、手話の記憶課題)において生じる現象がSPTs理論によって説明可能かを検討し、③SPTsを超えた包括的な理論を提案した。

東北大学大学院情報科学研究科

博士(情報科学) 辻 義人

「学習者の手続き的知識の獲得を促す説明活動のあり方—コンピュータ操作技能に注目して—」

コンピュータ操作の説明場面における対話に注目し、手続き的知識の獲得を促す説明のあり方について検討した。説明者と学習者の対話プロトコルより、説明者が意図的に学習者に質問を行い、思考と説明を促す場面が観察された。コンピュータ操作技能の背景要因モデルの検討結果に基づき、説明者の学習者に対する質問の効果の検討を行った。その結果、学習者の誤概念が修正され、課題に対する積極性が向上することが示された。

筑波大学大学院人間総合科学研究科

博士(心理学) 香川 秀太

「学内学習—臨地実習間の状況間移動に伴う看護学生の学習過程：境界横断論の観点から」

活動理論における境界横断論に基づき、学内と、臨地実習との間を行き来する中での看護学生の学習・発達過程を、質的、量的に検討した。①学習転移論と境界横断論との違いを論じつつ、後者の特徴を14のポイントに整理した。②学内から実習への過程における、思考技術的側面と、③身体技術的側面の学習過程、並びに④逆方向の、実習から学内への学習過程を分析した。最後に、⑤学習転移、境界横断論の新たな方向性を議論した。

筑波大学大学院人間総合科学研究科

博士(心理学) 武蔵 由佳

「大学生に対する構成的グループ・エンカウンターの手法を活用した心理教育的援助」

本研究は、構成的グループ・エンカウンター(SGE)の手法を活用して大学生の対人関係形成を促すための心理教育的援助のプログラムを作成したものである。具体的には、SGEのエクササイズの種類やメンバーの組み合わせなどのプログラムの展開の仕方を変化させた実践を行い、SGEの“構成”の規則性とその有効性について検討した。そして、そのプログラムが最終的には、大学生の心理社会的発達の促進に寄与することを明らかにした。

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

博士(人文科学) 浅野 志津子

「人はなぜ生涯学び続けるか—放送大学学生の学習動機づけと学習方略の検討—」

放送大学学生のどのような学習動機・楽しさ・学習方略が学習への積極性と継続性に影響しているのかを明らかにした。積極性に関しては特定の課題を志向する学習動機、時間を制御する学習方略、発展探究的な学習方略が影響し、継続性に関しては自己向上を志向する学習動機、知る楽しさ、発展探究的な学習方略が影響していた。面接調査も行い、動機形成のプロセス、楽しさへの学歴の影響、積極性・継続性が低い人の特徴を検討した。

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

博士(心理学) 石毛 みどり

「中学生のレジリエンシー：尺度の作成とその有効性の検証」

ストレスのある出来事への対処能力であるレジリエンシー(弾力性)の傾向を中学生対象に検討し、その概念と尺度の適応指導への有効性を示した。まず尺度を作成し信頼性と妥当性を確認した。尺度を用いレジリエンシーは人格特性因子と関連するが関連の弱い因子もある、またレジリエンシーは無気力感を直接に、間接的にはコーピングや自尊感情を介して予測し、さらに3年生の高校受験前のストレス軽減と受験後の成長感の促進に影響す